様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2009～2013
課題番号：２１３３０１７７

研究課題名（和文）Ｅ．ＦＯＲＵＭカリキュラム設計データベースを活用したスタンダードの開発

研究課題名（英文）Developing Standards Using Curriculum-Design Database of E.FORUM

研究代表者
矢野　智司（Yano, Satoji）

京都大学・教育学研究科（研究院）・教授

研究者番号：６０１５８０３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　13,800,000円、（間接経費）　4,140,000円

研究成果の概要（和文）：　京都大学大学院教育学研究科E.FORUMでは、毎年、全国スクールリーダー育成研修を提供するとともに、掲示板を併設したデータベース（「カリキュラム設計データベース」、後に「E.FORUM Online」）を開設している。
　本研究では、各教科の目標や評価に関する国内外の理論や実践について調査するとともに、E.FORUMのシステムを活用して「E.FORUMスタンダード（第１次案）」を開発した。スタンダードとは、社会的に共通理解された教育目標・評価基準を意味している。「第１次案」では学校現場の利用に供するため、各教科の「本質的な問い」や「永続的理解」、パフォーマンス課題の例などを整理した。

研究成果の概要（英文）：In 2006, the Graduate School of Education at Kyoto University established a network called "E.FORUM." This network offers training programs for educational leaders every year. It also maintains databases, namely the Curriculum-Design Database (2006-2012) and E.FORUM Online (2012 onwards). Internet bulletin boards are attached to those databases.
This study has synthesized the research on theories and practices relating to the goals and assessments of various academic subjects in Japan and other countries. Furthermore, by using the E.FORUM system, this study has also developed the "E.FORUM Standards: The First Proposal," where a "standard" is understood to mean the goals and assessment criteria collectively shared in a society. This proposal lists the essential questions, enduring understandings, and examples of performance tasks in each subject, all of which are expected to be useful for improving teaching practices at schools.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：教育評価　カリキュラム　データベース　スタンダード　パフォーマンス評価　パフォーマンス課題　ルーブリック　思考力・判断力・表現力

１．研究開始当初の背景

中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」(平成 17 年 10 月 26 日)では、「国の責任によるインプット（目標設定とその実現のための基盤整備）を土台にして、プロセス（実施過程）は市区町村や学校が担い、アウトカム（教育の結果）を国の責任で検証し、質を保証する教育システムへの転換」が打ち出された。インプットを規定するナショナル・スタンダードとしては学習指導要領が存在しており、またアウトカムの検証としては「全国学力・学習状況調査」や「特定の課題に関する調査」が行われ始めた。

一方、諸外国、とりわけ英米では 1980 年代以降スタンダードの研究開発が進んでいる。スタンダードとは、社会的に共通理解されている目標・評価基準を意味している。日本の状況と比較した場合、そこには次の三点で先進性が見られる。第一に、結果の検証のためには、筆記テストだけでなくパフォーマンス課題が活用されている。パフォーマンス課題とは、知識やスキルを総合して活用することを求めるような複雑な課題である。第二に、成文化されたスタンダードに基づき学校で保障すべき学力を明確化する一方で、学校での研究成果を反映させつつ成文化されたスタンダードを練り直すというサイクルが構築されている。第三に、そうして開発されたスタンダードが、典型的な作品例とともにインターネット上で公開されており、教師たちの実践に役立っている。

ところで、京都大学大学院教育学研究科は、平成 18 年度に E.FORUM を設立した。E.FORUM では毎年、「全国スクールリーダー育成研修」を提供している。その中では、上記の英米の実績に学びつつ、パフォーマンス課題やルーブリックの開発の仕方を伝えるワークショップを提供してきた。また、研修受講者が研修内容を生かして実践に取り組み、その成果を持ち寄って交流する機会として「学校教育研究フェスタ」と「実践交流会」を開催している。さらに「カリキュラム設計データベース（Curriculum Design Database)」(以下、CDDB）を開設し、研修受講者やその紹介者である E.FORUM 会員が、開発したパフォーマンス課題やルーブリック、さらには児童・生徒の作品例などを共有・蓄積するシステムを構築した。CDDB には、会員が日常的に意見交換を行うことのできる掲示板も開設しており、会員からの質問に対応して大学教員が指導・助言を行うなどのサポートも提供してきた。

そこで、本研究では、CDDB に蓄積されているデータを詳細に分析することにより、教師たちが質の高い実践を生み出す上で役立つようなスタンダードを開発することをめざした。

２．研究の目的

本研究は、CDDB を活用することによって、教育現場に役立つスタンダードを開発することを目的とした。具体的には、次の 5 点に取り組むことを目標とした。

- E.FORUM の提供する研修や、研究協力校での研究開発を通して、各教科において提供されうるパフォーマンス課題を開発し、CDDB に事例を蓄積する。
- CDDB に蓄積されたデータをもとに、各教科におけるスタンダードを開発する。
- 国内外のスタンダードに関わる様々な理論的・実践的蓄積について調査し、スタンダード作りの参考とする。
- 必要に応じて CDDB のシステムを更新・改善する。
- 学会や E.FORUM の研修において、研究成果を発表する。

３．研究の方法

スタンダード開発の取り組みは、具体的には次のような手順で進められることとなった。

①『「スタンダード作り」基礎資料集』の作成（2010 年 8 月）

E.FORUM では、ウィギンズ(Wiggins, G.）とマクタイ（McTighe, J.）の提唱する『理解をもたらすカリキュラム設計』論（通称「逆向き設計」論）を踏まえ、パフォーマンス課題を作るワークショップを提供してきた。「逆向き設計」論では、教科を貫く包括的な「本質的な問い」に対応させてパフォーマンス課題を用いることが提案されている。また、「本質的な問い」に対応する「永続的理解」を明文化することで、子どもたちに理解させたい内容の水準を明確にすることを勧めている。このような「逆向き設計」論のカリキュラム構想は、スタンダード開発を進める上で有効な枠組みを提供してくれるものである。

本研究では、まず、パフォーマンス課題を取り入れた実践に 1 年以上取り組んでこられた E.FORUM 会員に寄稿をよびかけ、『基礎資料集』を作成した。

②「学校教育研究フェスタ」でのシンポジウムの開催（2010 年 8 月、2011 年 8 月）

次に、『基礎資料集』や CDDB に蓄積されたデータ、学習指導要領や諸外国で開発されているスタンダードなどを踏まえつつ、各教科における重点目標を検討するシンポジウムを開催した。2010 年は算数・数学（石井英真氏)、国語（八田幸恵氏)、英語（赤沢真世氏）の 3 教科について、2011 年度はこれらの教科に加えて社会（鋒山泰弘氏)、理科（中池竜一氏）について提案を行った（左記（　）内は、それぞれの教科についての取りまとめ担当者を示している)。

この成果については、雑誌『指導と評価』の連載「思考力・判断力・表現力を育てるパフォーマンス課題」(2011 年 10 月号～2012

年 3 月号）においても報告する機会が得られた。連載では、上記 5 教科について、「包括的な『本質的な問い』と対応する課題例」を整理した表を掲載した。

③教科等別分科会での検討（2012 年 8 月、2013 年 8 月）

2012 年度・2013 年度は、各教科の議論をさらに深めるため、教科等別分科会を開催した。この時、体育、技術・家庭科の担当として北原琢也氏、音楽、美術の取りまとめ担当者として小山英恵氏に加わっていただいた。

教科等別分科会では、各担当者が各教科の包括的な「本質的な問い」と「永続的理解」、パフォーマンス課題の例を整理した表の形で、「E.FORUM スタンダード（草案）」を提案した。また、2-3 名の会員による実践報告（2012 年度）や、参加者による実践交流（2012・2013 年度）などを行った。特に、2013 年度については、「E.FORUM スタンダード（草案）」の拡大コピーを用意し、参加者がグループに分かれて気づきを付箋紙に書く、さらにそれらを紹介し合いながら検討をする、というワークショップ形式を取ったことで、スタンダードの検討を深めることができた。

４．研究成果

本研究の主な成果としては、下記をあげることができる。

第 1 に、CDDB の後継データベースとして、「E.FORUM Online（EFO）」を開設するとともに、CDDB からのデータ移行を完了し、さらにデータの蓄積を進めることができた。

第 2 に、スタンダードに関わる国内外の理論的・実践的蓄積について調査した。

第 3 に、『「スタンダード作り」基礎資料集』、CDDB や EFO に蓄積されたデータ等を踏まえつつ、国語、社会、算数・数学、理科、体育・保健体育、技術・家庭科、音楽、音楽、美術、英語の各教科について、「E.FORUM スタンダード（第１次案）」を作成した。これは、ⓐ各教科・領域で問われるべき「本質的な問い」、ⓑ児童・生徒が身につけるべき「永続的理解」、ⓒ対応するパフォーマンス課題の例を示すものである。「E.FORUM スタンダード（第１次案）」とその「解説」については、E.FORUM のウェブページ上でも公開した（http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/e-forum/kenkyu_seika/40/）。

これらの成果については、『「スタンダード作り」成果報告書』にまとめるとともに、学会や研修の場で報告することができた。

パフォーマンス課題は、平成 20 年改訂学習指導要領で重視されている「思考力・判断力・表現力」や、次の学習指導要領で重視されると思われる汎用的スキルの育成に有効なものとして注目されている。「E.FORUM スタンダード（第１次案）」が今後、実践現場で広く活用されることを期待したい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 78 件）

① 石井英真「高次の学力を伸長する指導のあり方に関する一考察――パフォーマンス評価を取り入れた『平方根』の授業実践の分析を通して――」全国数学教育学会『数学教育学研究』第 18 巻第 2 号，査読有，2012 年，pp.91-98

② 石井英真「算数・数学教育の立場から――『数学する活動』を軸にした目標と評価のあり方――」『教育目標・評価学会紀要』第 22 号，査読有，2012 年，pp.1-8

③ 西岡加名恵「教科教育におけるスタンダード開発の課題と展望――『逆向き設計』論からの提案」『教育目標・評価学会紀要』第 22 号，査読有，2012 年，pp.35-42

④ 赤沢真世ほか「大学生のサービスラーニングにおける運動指導が小学校の体育的活動に及ぼす影響の検討：草津市における長縄オリエンテーションを対象として」立命館大学教育開発推進機構『立命館高等教育研究』第 13 号，査読有，2013 年，pp.107-120

⑤ 川崎良孝「アメリカ図書館協会 1938 年『倫理綱領』の成立と性格」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第 59 号，査読有，2013 年，pp.25-49

⑥ 田中耕治「教育評価論からみた新指導要録の特徴と課題」『教育目標・評価学会紀要』第 21 号，査読有，2011 年，pp.1-9

⑦ Koji TANAKA, "Development of Formative Assessment in Japan" *Proceedings of the International Conference on Classroom Assessment*, 査読有, 2011 年, pp.158-167

⑧ 中池竜一・三輪和久・森田純哉・寺井仁「認知科学の入門的授業に供する Web-based プロダクションシステムの開発」『人工知能学会論文誌』第 5 号，査読有，2011 年，pp.536-546

⑨ 趙卿我「韓国の『遂行評価（performance assessment）』をめぐる政策動向の分析」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第 57 号，査読有，2011 年，pp.50-65

⑩ 趙卿我「韓国における『学業成就度評価』の検討―学力向上教育政策における意義とは―」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第 58 号，査読有，2012 年，pp.27-44

⑪ 八田幸恵「国語科における思考力の内実に関する課題整理―PISA2009 読解リテラシーにおける評価の枠組みの特徴分析を中心に―」『教育目標・評価学会紀要』第 21 号，査読有，2011 年，pp.171-209

⑫ 吉田右子・川崎良孝「クリスティン・ポーリーと図書館史研究」『図書館界』62 巻 6 号，査読有，2011 年，pp.392-410

⑬ 川崎良孝「公立図書館というスペースの

思想的総合性：集会室や展示空間へのアクセス：歴史的概観」『現代の図書館』，48 巻 3 号，査読有，2010 年，pp. 147-162

⑭ 田中耕治「実践的指導力を問う－教育実践研究の立場から－」『教師教育研究』23 巻，査読有，2010 年，pp.11-15

⑮ 趙卿我「韓国における教育評価改革の変遷」『教育目標・評価学会紀要』第 20 号，査読有，2010 年，pp.39-48.

⑯ 土成永侑・福嶋一希・印塚正恵・加藤千鶴・遠藤貴広・八田幸恵・大和真希子「能力発達を支える実践研究の方法論－DeSeCo のコンピテンス概念と日本の教育実践記録を手掛かりに－」『福井大学教育実践研究』35 巻，査読有，2010 年，pp.9-20

⑰ 石井英真「アメリカにおける教育目標論の展開－パフォーマンス評価論による行動目標論の問い直し－」『カリキュラム研究』18 巻，査読有，2009 年，pp.59-71

⑱ 八田幸恵「リー・ショーマンにおける教師の知識と学習過程に関する理論の展開」『教育方法学研究』第 34 巻，査読有，2009 年，pp.1-12

〔学会発表〕（計 33 件）

① 西岡加名恵・石井英真・赤沢真世・中池竜一・鋒山泰弘・八田幸恵・小山英恵・北原琢也「E.FORUM スタンダード開発の試み――算数・数学科と英語科を中心に――」教育目標・評価学会第 24 回大会，自由研究発表（於　滋賀大学，2013 年 12 月 1 日）

② 川崎良孝「読書空間としての図書館の歴史と現状」中国文化部（中国図書館大会），招待講演（於　上海世界博会場，2013 年 11 月 7 日）

③ 石井英真「アメリカにおけるスタンダード運動の展開と高校教育改革――大学やキャリアとの接続に焦点を当てて――」日本カリキュラム学会第 24 回大会，課題研究Ⅱ「後期中等教育のカリキュラム改革の動向」，招待講演（於　上越教育大学，2013 年 7 月 6 日）

④ 八田幸恵「アメリカにおける Reading の教育目標論の展開」全国大学国語教育学会（於　広島大学，2013 年 10 月 26 日～2013 年 10 月 27 日）

⑤ 矢野智司「教育学史の再検討Ⅳ――『原子力時代』のはじまりと戦後教育学」教育哲学会第 55 回大会，ラウンドテーブル発表（於　早稲田大学，2012 年 9 月 17 日）

⑥ 矢野智司「それからの教育学に向けて――死者との関わりから見た戦後教育学」教育学関連諸学会共同シンポジウム「教育学の存在根拠を問い直す」，招待講演（於　東京大学，2012 年 12 月 16 日）

⑦ 石井英真「現代日本において学力向上政策がもたらすもの」日本デューイ学会第 56 回大会公開シンポジウム「『NCLB 法（どの子も置き去りにしない法）』と日本への影響を吟味する」，招待講演（於　東洋大学，2012 年 9 月 22 日）

⑧ 石井英真「教室の内側からの評価改革――『学習のための評価』論とネブラスカ州の評価システムに焦点を当てて――」教育目標・評価学会第 23 回大会，自由研究発表（於　東洋大学，2012 年 11 月 11 日）

⑨ 西岡加名恵「パフォーマンス課題における共通性の保障と『個に応じた指導』――京都府立園部高等学校英語科の取り組み――」日本教育方法学会第 48 回大会，自由研究発表（於　福井大学，2012 年 10 月 6 日）

⑩ 鋒山泰弘「現代イギリスにおける『能力決定観』を克服する教育実践の特質」教育目標・評価学会第 23 回大会，自由研究発表（於　東洋大学，2012 年 11 月 11 日）

⑪ 赤沢真世「ホール・ランゲージにおける『音韻認識能力』を高める指導――小学校外国語活動における文字指導への示唆――」教育目標・評価学会第 23 回大会，自由研究発表（於　東洋大学，2012 年 11 月 11 日）

⑫ 川崎良孝「21 世紀の図書館を考える」上海市図書館学会，招待講演（於　華東師範大学，2012 年 9 月 12 日）

⑬ Koji TANAKA，”Development of Formative Assessment in Japan” International Conference on Classroom Assessment，招待講演（於　華東師範大学，2011 年 11 月 5 日）

⑭ 西岡加名恵「『目標に準拠した評価』の充実をどう図るか」教育目標・評価学会第 22 回大会，公開シンポジウム　招待講演（於　奈良教育大学，2011 年 11 月 20 日）

⑮ 趙卿我「韓国のパフォーマンス評価に関する政策と実践の展開－『科学』の『教育課程』改革に焦点をあてて－」日本カリキュラム学会第 22 回大会（於　北海道大学，2011 年 7 月 16 日）

⑯ 石井英真「算数・数学教育の立場から」教育目標・評価学会第 22 回大会，課題研究 1「教育目標・評価と指導の現状と課題－教科教育の立場から－」，招待講演（於　奈良教育大学，2011 年 11 月 19 日）

⑰ 八田幸恵「アメリカにおける PCK 研究の展開」日本社会科教育学会，招待講演（於桜美林大学，2011 年 5 月 14 日）

⑱ 川崎良孝「住民の声を図書館運営に反映させる仕組み：日米の場合」上海市図書館学会，招待講演（於　上海図書館，2011 年 3 月 15 日）

⑲ 田中耕治「教育評価論からみた新指導要録の特徴と課題」教育目標・評価学会，公開シンポジウム「指導要録改訂期における指導と評価の課題と展望」，招待講演（於　共愛学園前

橋国際大学，2010 年 12 月 12 日）
⑳ 田中耕治「これからの新しい教育評価のあり方」日本国語教育学会熊本支部研究会，招待講演（於　熊本大学，2010 年 12 月 25 日）
㉑ 赤沢真世「外国語活動における一人ひとりの実態を捉える評価の工夫－ホール・ランゲージにおける評価方法を手がかりに－」日本児童英語教育学会設立 30 周年大会，秋季研究大会（於　大阪成蹊大学，2010 年 11 月 7 日）
㉒ 赤沢真世「現代アメリカにおける４ブロックス・アプローチの理論と実践－ホール・ランゲージとフォニックスの統合を目指して－」日本児童英語教育学会関西支部　第 1 回論文研究会（於　常翔学園大阪センター，2011 日 1 月 29 日）
㉓ 石井英真「学力論議の現在－ポスト近代社会における学力の論じ方－」日本教育学会第 69 回大会（於　広島大学，2010 年 8 月 22 日）
㉔ 石井英真「NCLB 法を問い直す視座―スタンダードに基づく教育改革のローカルな展開に着目して―」日本教育学会（於　東京大学，2009 年 8 月 29 日）

〔図書〕（計 58 件）
① 京都大学大学院教育学研究科 E.FORUM「E.FORUM 共同研究プロジェクト【プロジェクト S】『スタンダード作り』成果報告書」京都大学大学院教育学研究科, 2014 年，全 179 頁
② 京都大学大学院教育学研究科 E.FORUM『平成 24 年度成果報告書「E.FORUM 全国スクールリーダー育成研修」』京都大学大学院教育学研究科，2013 年，全 284 頁
③ 矢野智司『幼児理解の現象学――メディアが開く子どもの生命世界』萌文書林，2014 年，全 310 頁
④ 田中耕治『教育評価と教育実践の課題――「評価の時代」を拓く』三学出版，2013 年，全 221 頁
⑤ 京都大学大学院教育学研究科 E.FORUM『平成 23 年度成果報告書「E.FORUM 全国スクールリーダー育成研修」』京都大学大学院教育学研究科，2012 年，全 217 頁
⑥ 田中耕治ほか『新しい時代の教育方法』有斐閣，2012 年，全 229 頁
⑦ 石井英真「学力向上」篠原清昭編『学校改善マネジメント』ミネルヴァ書房, 2012 年，pp.136-150（全 277 頁）
⑧ 石井英真「教室の内側からの評価改革――『学習のための評価』論とネブラスカ州の評価システムに焦点を当てて――」北野秋男・吉良直・大桃敏行編『アメリカ教育改革の最前線――頂上への競争――』学術出版会, 2012 年, pp.245-261（全 285 頁）
⑨ 西岡加名恵「学習の評価」篠原正典・宮寺晃夫編『新しい教育の方法と技術』ミネルヴァ書房，2012 年，pp.165-188（全 241 頁）
⑩ 鋒山泰弘「制度としての『評価の圧力』の下での実践の創造」グループ・ディダクティカ編『教師になること、教師であり続けること』勁草書房，2012 年，pp.224-241（全 262 頁）
⑪ 川崎良孝『秘密性とプライヴァシー：アメリカ図書館協会の方針』京都図書館情報学研究会，2012 年，全 139 頁
⑫ 田中耕治「なぜ、いまパフォーマンス評価なのか」「パフォーマンス評価とは何か」田中耕治編著『パフォーマンス評価－思考力・判断力・表現力を育む授業づくり』ぎょうせい，2011 年，pp.2-17（全 211 頁）
⑬ 田中耕治・森脇健夫・徳岡慶一『授業づくりと学びの創造』学文社，2011 年，全 165 頁
⑭ 京都大学大学院教育学研究科 E.FORUM『平成 23 年度成果報告書「E.FORUM 全国スクールリーダー育成研修」』京都大学大学院教育学研究科，2011 年，全 248 頁
⑮ 趙卿我「韓国におけるパフォーマンス評価」田中耕治編著『パフォーマンス評価－思考力・判断力・表現力を育む授業づくり』ぎょうせい，2011 年，pp.180-187（全 211 頁）
⑯ 石井英真「パフォーマンス評価をどう実践するか」田中耕治編著『パフォーマンス評価－思考力・判断力・表現力を育む授業づくり』ぎょうせい，2011 年，pp.18-37（全 211 頁）
⑰ 八田幸恵「カリキュラム研究と教師教育―アメリカにおける PCK 研究の展開―」岩田康之・三石初雄編『現代の教育改革と教師―これからの教師教育研究のために―』東京学芸大学出版会，2012 年，pp.154-166（全 229 頁）
⑱ 八田幸恵「21 世紀の日本における教師教育改革について」辻本雅史・袁振国監修南部広孝・高峡編『東アジア新時代の日本の教育―中国との対話―』京都大学学術出版会,2012 年 pp.216-227（全 370 頁）
⑲ 京都大学大学院教育学研究科 E.FORUM『「スタンダード作り」基礎資料集』京都大学大学院教育学研究科, 2010 年, 全 269 頁
⑳ 田中耕治『教育評価』北京師範大学出版社，2011 年，全 219 頁
㉑ 田中耕治『新しい「評価のあり方」を拓く―「目標に準拠した評価」のこれまでとこれから―』日本標準，2010 年，全 61 頁
㉒ 田中耕治「戦後授業研究のあゆみ」「評価を生かす授業づくり」田中耕治・森脇健夫・徳岡慶一『授業づく

りと学びの創造』学文社，2010 年，pp.7-36，pp.136-161（全 165 頁）
㉓ 田中耕治「指導要録のあゆみとこれから」田中耕治編著『小学校　新指導要録改訂のポイント』日本標準，2010 年，pp.130-150（全 223 頁）
㉔ 西岡加名恵「指導要録改訂の方向性と今後の評価の在り方」田中耕治編著『小学校　新指導要録改訂のポイント』日本標準，2010 年，pp.8-23（全 223 頁）
㉖ 三藤あさみ・西岡加名恵『パフォーマンス評価にどう取り組むか』日本標準，2010 年，全 62 頁
㉗ 西岡加名恵「パフォーマンス評価の活用」小島宏・岩谷俊行編著『新しい学習評価のポイントと実践（第 3 巻）』ぎょうせい，2010 年，pp.79-92（全 266 頁）
㉘ 西岡加名恵「国際学力調査と米英のスタンダードにみる目標論」「評価方法をデザインする」堀哲夫・西岡加名恵『授業と評価をデザインする理科』日本標準，2010 年，pp.149-159，pp.172-205（全 239 頁）
㉙ 西岡加名恵「学力評価」教育目標・評価学会編『「評価の時代」を読み解く（上）』日本標準，2010 年，pp.54-63（全 188 頁）
㉚ 赤沢真世「外国語活動－子どもの実態を踏まえ、伝え合うコミュニケーション場面を設定する－」田中耕治編著『小学校　評価のあり方・指導要録改訂のポイント』日本標準，2010 年，pp.86-91（全 223 頁）
㉛ 石井英真「算数－パフォーマンス評価を生かして『活用する力』を育てる－」田中耕治編『小学校　新指導要録改訂のポイント』日本標準，2010 年，pp.38-43（全 223 頁）
㉜ 石井英真「算数・数学」教育目標・評価学会編『「評価の時代」を読み解く（下）』日本標準，2010 年，pp.32-41（全 176 頁）
㉞ 石井英真『現代アメリカにおける学力形成論の展開－スタンダードに基づくカリキュラムの設計－』東信堂，2011 年，全 374 頁
㉟ 田中耕治編著『よくわかる教育課程』ミネルヴァ書房，2009 年，全 216 頁
㊱ 田中耕治・西岡加名恵編著『「活用する力」を育てる授業と評価　中学校――パフォーマンス課題とルーブリックの提案――』学事出版，2009 年，全 144 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等
E.FORUM トップページ
http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/e-forum/
E.FORUM スタンダード（第 1 次案）
http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/e-forum/kenkyu_seika/40/

6．研究組織

(1)研究代表者
矢野　智司（YANO SATOJI）
京都大学・教育学研究科・教授
研究者番号：60158037

(2)研究分担者
中池　竜一（NAKAIKE RYUICHI）
京都大学・教育学研究科・助教
研究者番号：00378499

田中　耕治（TANAKA KOUJI）
京都大学・教育学研究科・教授
研究者番号：10135494

石井　英真（ISHII TERUMASA）
京都大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：10452327

西岡　加名恵（NISHIOKA KANAE）
京都大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：20322266

鋒山　泰弘（HOKOYAMA YASUHIRO）
追手門学院大学・心理学部・教授
研究者番号：30209217

川崎　良孝（KAWASAKI YOSHITAKA）
京都大学・教育学研究科・教授
研究者番号：80149517

趙　卿我（CHO GYONA）
京都大学・教育学研究科・助教
研究者番号：30583140
（H23 まで分担者として参画）

赤沢　真世（AKAZAWA MASAYO）
立命館大学・スポーツ健康科学部・准教授
研究者番号：60508430

八田　幸恵（HATTA SACHIE）
大阪教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：60513299

(3)連携研究者
なし